

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02446

研究課題名（和文）インクルーシブ・カリキュラムの国際比較研究

研究課題名（英文）International comparative study of inclusive curriculum

研究代表者

新井 英靖（ARAI, HIDEYASU）

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：30332547

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、発達障害児や外国にルーツをもつ子ども、貧困家庭の子どもなど、小・中学校の多様な困難を抱える子どもがアクティブに学ぶことができる「インクルーシブ・カリキュラム」を開発することを目的として研究を行った。その結果、インクルーシブ教育を先駆的に進めてきた英国・ドイツのインクルーシブ・カリキュラムの編成原理として、特別な支援の提供ではなく、通常の学級のカリキュラムの改編が行われていること、日本の小・中学校における特別ニーズのある子どもへの教科学習時のカリキュラム開発においても通常学校の授業改善が重要な視点となることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで特別支援教育では、特別なニーズのある子どもに対する支援方法を検討することが中心であったが、本研究により、インクルーシブ・カリキュラムでは通常学校の授業改善や教育的価値の転換が求められることが明らかになった。この知見は今後、日本が国際的にインクルージョンを進めていく際の基本原理となり、これが本研究の社会的意義であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the inclusive curriculum for children with special needs in regular school in a comparative study between Japan and European countries. The results are that in an inclusive curriculum, there needs not only special support for children's needs but also school developments for daily lessons in regular class.

研究分野：特別支援教育

キーワード：特別支援教育 インクルーシブ教育 学校改善 国際比較研究

### 1. 研究開始当初の背景

平成29年に改訂された新しい学習指導要領では、すべての子どもに「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）を実現することが求められている。こうした教育改革は全世界的な潮流であるが、発達障害児や外国にルーツをもつ子ども、貧困家庭の子どもなど、小・中学校の多様な困難を抱える子どもは、さまざまな制約からアクティブに学ぶことが難しく、教育・福祉両面から「特別な支援」を必要としている。

これまで、本研究グループは学習上困難を抱える子どもたちが、楽しく学習に参加できる授業方法について国際比較研究を進めてきた。この研究では、インクルーシブ授業の実現には、教師が教材や授業展開を工夫し「子どもの学びの過程」を創り出すことや、多職種が協働して放課後を含めた学びを創り出していくことが重要であることを明らかにしてきた（湯浅恭正・新井英靖編著『インクルーシブ授業の国際比較研究』福村出版 [平成29年度科学研究費補助金出版助成・学術図書] および平成28年度～30年度科学研究費補助金基盤研究C「多職種協働によるインクルーシブ教育の推進に関する国際比較研究」：課題番号16K04503）。

一方、これらの研究を通して、発達障害児や外国にルーツをもつ子ども、貧困家庭の子どもなど、小・中学校の多様な困難を抱える子どものインクルーシブ教育には、**各教科・放課後・家庭のそれぞれの学習を個別に支援するのではなく、教科間のつながりや学校と家庭・放課後をつなぐ「インクルーシブ・カリキュラム」の開発が必要である**ということが研究課題として浮上した。こうしたインクルーシブ・カリキュラムについては、海外（特に欧州）では比較的、研究の蓄積があるが、日本ではこうした視点からの研究が極めて乏しく、国際的な視点からの学術研究と日本国内における実践開発を同時並行的に行うことが求められている。具体的には、発達障害児や外国にルーツをもつ子ども、貧困家庭の子どもなど、通常の教科学習において困難を伴う子どもが、学校での授業において主体的・対話的で深い学びを実現するためのカリキュラム開発と、学童保育や家庭教育を含めた学校外での学びと学校教育での指導を「つなぐ」ためのカリキュラム開発、の2点を検討する必要がある。そこで、小・中学校の多様な困難を抱える子どもがアクティブに学ぶことができる「インクルーシブ・カリキュラム」に関して欧州（特にドイツと英国）と日本の現状・課題を比較研究し、具体的な解決策を検討することが必要であると考えた。

### 2. 研究の目的

日本では、これまで学習指導要領に記載されている事項を全国の学校が統一的に指導してきたこともあり、「カリキュラム研究」はあまり蓄積されていない。特に、学習困難児に対するインクルーシブ教育の研究は授業時の指導技術に特化したものが多く、インクルーシブ・カリキュラムの開発に焦点を当てた研究は皆無に等しい。しかし、新学習指導要領では「教員の創意工夫によって、社会に開かれた教育課程やカリキュラム・マネジメントを実現すること」が求められており、個々の子どもの困難やニーズに応じて「特別な支援」を提供しながら、すべての子どもが共同的に学び、その学びを深めていくことができるカリキュラムの開発が喫緊の課題である。そこで、本研究では、英国・ドイツのカリキュラム開発の実践事例を明らかにするとともに、そこで示されている理論や実践方法を日本の学校教育の文化的特徴をふまえて再構築した日本型のインクルーシブ・カリキュラムを開発することを研究の目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究は、上記の目的を達成するために、以下の2つの研究を実施した。

- (1) 英国・ドイツのインクルーシブ・カリキュラムの原理と実際に関する研究
- (2) 日本における発達障害等の学習困難児がアクティブに学ぶための教科等横断的視点での授業づくりの方法と、社会教育及び家庭教育を含めたカリキュラム・マネジメントに関する研究

#### 4. 研究成果

- (1) 英国・ドイツのインクルーシブ・カリキュラムの原理と実際に関する研究

##### ①英国のインクルーシブ・カリキュラムの原理と実際に関する研究

まず、英国で特別ニーズのある子どもに対する PSHE (Personal, Social, Health and Economic) 教育の実践課題を明らかにするとともに、特別な教育的ニーズのある子どもや障害児が、PSHE 教育の時間にどのような内容の授業を受けているのかという点を明らかにした。その結果、英国の PSHE 教育は、すべての子どもの人格や社会性、あるいは健康教育に寄与する教育プログラムとして設定されていて、2010 年代においても重要な科目の一つとして位置づけられていた。しかし、通常の学校では、教科指導との関係があいまいであったり、学校の実践に体系的性が欠けているなど、実践上の課題があることが指摘された。そうしたなかで、英国では、PSHE 教育の内容と方法を体系化するべく、実践のための計画枠組みを作成し、全国的に普及させていった。

一方で、特別な教育的ニーズのある子どもや障害児に対する PSHE 教育については、子どもの学習困難への対応に必要性の高い項目が多く含まれていたこともあり、通常の学校と比較すると計画的・体系的に取り組んでいた学校が多いことが明らかになった。本研究では、いくつかの特別学校の PSHE 教育の実践事例を挙げたが、これらの学校では、週時程に PSHE 教育の時間を組み入れ、健康や人間関係に関する項目を学習するとともに、他の教科等の指導と連携しながら、学校教育全体を通じて人格や社会性、あるいは健康に関する項目を指導していることが明らかになった。

以上のように、特別な教育的ニーズのある子どもや障害児に対する PSHE 教育は、「健康」「人間関係」「コミュニケーション」「安全・安心」などの項目が中心となっていた。この点については、日本の特別支援教育で実施されている自立活動の 6 つの柱と類似していた。しかし、英国の PSHE 教育は、特別な教育的ニーズのある子どもや障害児にのみ行われる「特別な教育課程」ではなく、すべての子どもに実践される教育の枠組みのなかで、上記のような実践を展開していたという点に特徴があると考えた。

続いて、英国で特別な教育的ニーズや障害児に対する PSHE 教育のカリキュラムの内容とその指導・評価の方法を明らかにした。その結果、英国では「安心できる学習環境」をつくるために児童生徒にわかるようにルールを示し、学校全体で取り組むことになっていた。こうした学習環境づくりを基本にして、PSHE 教育の時間には、感情調整力や自己認識を高めるための教材(トピックス)を用意し、特別な教育的ニーズと障害児に対して指導していたことが明らかになった。

また、感情調整力や自己認識を高める指導においては、英国では体系化されたカリキュラムを一つずつ指導していくような「教科」型の指導ではなく、「トピックス」を取り上げ、そのなかで PSHE 教育の柱(ねらい)と関連させて指導する形を採用していた。また、評価しながら、指導内容や方法を考えるというように、指導と評価を一体化させながら PSHE 教育が実践されていたが、このとき採用されていた評価(アセスメント)は、決してチェックリストを設けて能力評価をするものではなく、現状の学習状況等を記述しながら、子どもの変化・成長を捉えていくものであった。特に、学習活動の最後に見せた子どもの姿(必ずしも言語的な反応だけでなく、写真や絵なども含めて)を捉えて、次の学習活動を考えるなど、

特別な教育的ニーズや障害児の学習ニーズを授業ベースで把握し、実践を発展させていることが推察された。

以上のように、英国の特別な教育的ニーズや障害児に対する PSHE 教育のカリキュラムと指導—評価の方法は、学習困難の特徴をふまえて身につけるべきコンピテンスを示しながらも、実践的には教材（トピックス）を提示し、そのなかで人間関係の力や感情調整の方法を学ぶというものであった。

## ②ドイツのインクルーシブ・カリキュラムの原理と実際に関する研究

ドイツ教授学において、これまで「統一と分化の原理」が検討されてきた。とりわけ、学級内での多様な個別化をめざす内的分化は、今日のインクルーシブ教育においても注目されている。

こうした「統一と分化の原理」のもと、インテグレーションからインクルージョンへの時代において、ドイツでは、共通の学びをつくり出すことが注目されていた。そこで、すべての子どもたちに同じ内容が学ばれるような「共通の対象」に沿って協同をつくり出しているところに特徴が見られるフォイザーの発達論的教授学を、カリキュラムの視点から検討した。フォイザーは、子どもを障害児もしくは健常児と二分してとらえるのではなく、ヴィゴツキーの発達の最近接領域の考え方から、子どもの発達水準に応じた多様な学びをつくり出すカリキュラムを構想していた。その際、すべてを個別カリキュラムのように別々にするのではなく、「共通の対象」に沿った協同を構想することで、発達の最近接領域の理論によって発達の促進の機会をすべての子どもたちにつくり出す授業を構想していたのである。このように、共通の学びは、協同を介してそれぞれの子どもの発達に大きく貢献するとともに、一人ひとりの個別化された目標に向かって方向づける力にもなる。

このことから、インクルーシブ教育時代にあっては、実践的課題として、一人ひとりの子どものために、共通の学びを介した一人ひとりの個別化された目標の達成が保障されるようなカリキュラムのあり方が論点となっていた。

なおドイツにおけるインクルーシブ・カリキュラムの原理を探るために「下層の子ども」の視点から教授学理論を展開してきたヒラー・GG のカリキュラム構想を検討した。そこでは従来の教授学が抱える課題・学習困難な子どものカリキュラムを生活に限定する還元主義、隠れたカリキュラムへの意識の薄さ、さらに教授学的一元論の範囲内での個別化—を抽出し、これらがわが国のインクルーシブ・カリキュラム改革を阻む要素であることを解明した。また地域との連携や学校後を見通した移行期におけるカリキュラム改革、子どもの日常の世界との距離の在り方等、インクルーシブ・カリキュラムの改革の基盤となる視点を解明した。

## (2) 日本における発達障害等の学習困難児を含めたインクルーシブ・カリキュラムの研究

本研究では、日本の授業実践をふまえて、どのような授業を展開すれば、日本の通常学校においてインクルーシブ・カリキュラムの創出が可能となるのかについて検討した。その結果、次のような研究成果が得られた。

すなわち、学校において教科書を用いた授業を行うとしても、生活経験から遊離したところで学ぶのではなく、実感をもって学ぶことができるように授業を展開することが重要である。もちろん、学校において実際の生活を再現し、経験を蓄積させていくことは現実的には難しいことではあるが、授業の中にさまざまな活動を織り交ぜて学ぶことができるよう

に工夫することはできるのではないかと考える。

たとえば、算数の時間に「買い物」をイメージして、「繰り下がり引き算」について学ぶ場面で、おもちゃのお金を子どもに配り、隣にいる友達とお金をやりとりしながら学ぶようにすることは可能だろう。そして、こうした活動的な学び（アクティブ・ラーニング）を多くの授業で展開していくことで、生活経験の不足が学習の理解度に左右されてしまうことが少なくなるのであれば、アクティブ・ラーニングは学習困難のある子どもが他の子どもと一緒に学ぶ可能性を広げる一つの方法であるといえるのではないか。

ただし、小学校高学年以上の学習になると、必ずしも生活と関連のある内容ばかりでなくなってくるといった点もふまえてアクティブな学びを考えていかなければならない。たとえば、「 $y=2x+4$ 」などの方程式は、常に生活のなかで使っているものではないかもしれない。筆者が参観した授業では、身近な先生の名前が提示されたので、「あの先生は長電話しそうだ！」などの会話で盛り上がりながら、式を考えている生徒たちが多かった。しかし、次第に「基本使用料の 400 円をどのように式に入れたらよいのか」といった点など、少しずつ式の意味を考え始めるようになっていった。

こうした学びをした生徒たちは、「先生、携帯電話は一定額を超えるとそれ以上払わなくてよくなる仕組みになっていると思うけど、それも式に表すことができるの?」といった関数に関連する疑問も出された。一方で、この授業に参加していた学習困難のある子どもは、自分で式を立てることは難しかったが、「 $30x$ 」の意味はわかったようで、通話時間 ( $x$ ) が長くなると、支払う料金が上がっていくことがこの式に表されているという理解にはなっていたようだった。

もちろん、数学のすべての課題が世の中にある現象と結びつけられるわけではない。たとえば、「素数」を探す問題や、図形の内角の和を求める問題などは、(生活から離れた) 数学的な興味を喚起するしかないものもあるだろう。しかし、それは逆に生活から遊離しているからこそ感じられる「数」の面白さであり、学習困難のある子どもの中には、むしろ生活とまったく関係のない内容を多く取り扱う中学校の学びのほうが、興味をもてる子どもがいるということも事実である。

このように、学習困難児を他の子どもと一緒に学ばせようとしたら、両者が共通して楽しく取り組むことができる教材を見つけることが求められる。通常の学校の授業であれば、フォーマルに用意されている教科書の内容をベースにしつつも、そこから抜け出し、クラスにいるすべての子どもが「みんな」「わいわいと」取り組むことができるようなアクティブな学びを展開していくことが必要であると考えられる。

ここまでに取り上げてきた学習困難児の学びの様子と授業づくりの方法をまとめると、すべての子どもを包摂するインクルーシブなカリキュラムの様相がみえてくる。すなわち、多様な子どもの価値を織り合わせながら、すべての子どもの学びを展開していくことがインクルーシブ・カリキュラムである。そして、一人の子どもの学びが他の子どもの価値と重なり合い、深い学びへと発展していくために、むしろ異質な存在と見られがちな学習困難のある子どもたちの学び方をふまえ、時には他の子どもの学びを変化させる契機とするような教育実践を展開することが、インクルーシブ・カリキュラムの創造に必要であると考えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖  | 4. 巻<br>71            |
| 2. 論文標題<br>英国のPSHE教育におけるSNE児への教育的対応                             | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>茨城大学教育学部紀要（教育科学）                                      | 6. 最初と最後の頁<br>311-321 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                           | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>渡邊鮎美・新井英靖   | 4. 巻<br>71            |
| 2. 論文標題<br>病弱特別支援学校における教師の指導技術に関する考察－英語科の授業実践における教師の演じ分け－       | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>茨城大学教育学部紀要（教育科学）                                      | 6. 最初と最後の頁<br>323-339 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                           | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>山本征紀・新井英靖   | 4. 巻<br>71            |
| 2. 論文標題<br>成人知的障害者に対する生涯学習支援に関する研究 - 障害福祉サービス事業所の生涯学習支援の実践を通して－ | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>茨城大学教育学部紀要（教育科学）                                      | 6. 最初と最後の頁<br>341-351 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                           | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>湯浅恭正  | 4. 巻<br>8             |
| 2. 論文標題<br>インクルーシブな学校・生活を志向する教授学の課題                             | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>広島都市学園大学子ども教育学部紀要                                     | 6. 最初と最後の頁<br>43-52   |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                          | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>湯浅恭正・加藤弘美                    | 4. 巻<br>8           |
| 2. 論文標題<br>特別なニーズのある青年の学びの場づくりをめぐる動向   | 5. 発行年<br>2022年     |
| 3. 雑誌名<br>広島都市学園大学子ども教育学部紀要            | 6. 最初と最後の頁<br>53-62 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖                         | 4. 巻<br>50            |
| 2. 論文標題<br>コロナ下におけるインクルーシブ教育の実践課題      | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>教育方法                         | 6. 最初と最後の頁<br>150-160 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>福田敦志                         | 4. 巻<br>903         |
| 2. 論文標題<br>子どもと学校をつくる決意と希望             | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>教育                           | 6. 最初と最後の頁<br>46-51 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>Atsushi FUKUDA   | 4. 巻<br>19            |
| 2. 論文標題<br>Issues in Conceptualizing ICT Educational Practices for Inclusion - Focusing on the Challenge of Bremen, Germany. | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>大阪教育大学学校教育教員養成課程学校教育コース教育学分野編『教育学研究論集』   | 6. 最初と最後の頁<br>88 - 98 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-             |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>福田敦志                         | 4. 巻<br>50            |
| 2. 論文標題<br>学童保育の現場から、子どもの生活保障を問う       | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>教育方法                         | 6. 最初と最後の頁<br>64 - 76 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>湯浅恭正                                      | 4. 巻<br>749         |
| 2. 論文標題<br>インクルーシブ教育の今日的課題を探る - リ・インクルージョン論を手がかりに - | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>『生活指導』                                    | 6. 最初と最後の頁<br>54-61 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                      | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難              | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>湯浅恭正                         | 4. 巻<br>3             |
| 2. 論文標題<br>特別支援教育と通常の教育をつなぐ学習集団の授業づくり  | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>『学習集団研究の現在』                  | 6. 最初と最後の頁<br>148-153 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|  |                   |
|--|-------------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖                         | 4. 巻<br>196       |
| 2. 論文標題<br>育成すべき資質・能力をおさえた授業づくり        | 5. 発行年<br>2020年   |
| 3. 雑誌名<br>『特別支援教育の実践情報』                | 6. 最初と最後の頁<br>4-7 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無        |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-         |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖                         | 4. 巻<br>1           |
| 2. 論文標題<br>言葉の理解と活用に困難を伴う子どもの国語の指導     | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>『国語科教育を問い直す』                 | 6. 最初と最後の頁<br>11-16 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖・山本征紀・渡邊鮎美・飛坂陽子・伊藤佳奈子・岸田美羽・山崎佑紀・亀山優佳・山口寧・石原真優子・吉田昌代・五味祥子・羽鳥健太・宮崎友美子・大内裕貴・鈴木杏奈・上松加穂理 | 4. 巻<br>38            |
| 2. 論文標題<br>保幼小接続期のカリキュラムと授業づくりに関する検討 保幼小接続期の学習のつまずきを軽減する教材の開発と学習の展開                               | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>茨城大学教育実践研究  | 6. 最初と最後の頁<br>101-114 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)   | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖   | 4. 巻<br>38          |
| 2. 論文標題<br>特別支援教育における実践論の特質に関する検討 障害特性をふまえた支援論と生活・経験主義にもとづく実践論を超える視座 | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>茨城大学教育実践研究   | 6. 最初と最後の頁<br>89-99 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                                       | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)                                | 国際共著<br>-           |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>湯浅恭正・新井英靖・福田敦志・吉田茂孝          | 4. 巻<br>13          |
| 2. 論文標題<br>インクルーシブ教育における多職種協働の課題       | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>中部大学現代教育学研究紀要                | 6. 最初と最後の頁<br>33-42 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>Atsushi FUKUDA  | 4. 巻<br>17          |
| 2. 論文標題<br>Perspectives and methods of creating a school worth living together - Based on the practice of Roland zu Bremen Oberschule - | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>教育学研究論集   | 6. 最初と最後の頁<br>49-56 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし  | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)   | 国際共著<br>-           |

[学会発表] 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>吉田茂孝・樋口裕介・北川剛司                     |
| 2. 発表標題<br>インクルーシブ教育における授業・カリキュラム・評価づくりの実践的課題 |
| 3. 学会等名<br>中国四国教育学会第73回大会                     |
| 4. 発表年<br>2021年                               |

|                               |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名<br>湯浅恭正               |
| 2. 発表標題<br>大学における知的障害青年の学びの課題 |
| 3. 学会等名<br>日本特殊教育学会第59回大会     |
| 4. 発表年<br>2021年               |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>吉田茂孝   |
| 2. 発表標題<br>「インクルーシブ教育における授業集団の検討 - アクティブ・ラーニングに焦点をあてて - 」 |
| 3. 学会等名<br>中国四国教育学会第72回大会                                 |
| 4. 発表年<br>2020年   |

|                                  |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>新井英靖                  |
| 2. 発表標題<br>特別支援教育の教授学を学習指導案から考える |
| 3. 学会等名<br>日本特殊教育学会第57会大会        |
| 4. 発表年<br>2019年                  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>吉田茂孝  |
| 2. 発表標題<br>現代ドイツのインクルーシブ授業におけるグループでの学びに関する研究 戦後からのグループの特質の変遷を中心に |
| 3. 学会等名<br>中国四国教育学会第71回大会  |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|                                   |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>福田敦志                   |
| 2. 発表標題<br>『生きるに値する』学校を子どもと共に創りだす |
| 3. 学会等名<br>日本教育方法学会               |
| 4. 発表年<br>2019年                   |

〔図書〕 計10件

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖                               | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>福村出版                               | 5. 総ページ数<br>293 |
| 3. 書名<br>特別支援教育のアクティブ・ラーニングとカリキュラム開発に関する実践研究 |                 |

|                                       |                 |
|---------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖                        | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>明治図書                        | 5. 総ページ数<br>164 |
| 3. 書名<br>特別支援学校学習指導要領「国語」「算数・数学」の学習評価 |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>Takamsa Yuasa・Hideyasu Arai・Atsushi Fukuda・Shigetaka Yoshida | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>Keisuisya  | 5. 総ページ数<br>151 |
| 3. 書名<br>Pedagogy of Cooperative and Inclusive Learning in Japan       |                 |

|                               |                 |
|-------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>湯浅恭正・福田敦志・新井英靖・吉田茂孝 | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>ミネルヴァ書房             | 5. 総ページ数<br>248 |
| 3. 書名<br>子どもとつくる教育方法の展開       |                 |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>Atsushi FUKUDA  | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>Routledge   | 5. 総ページ数<br>220 |
| 3. 書名<br>Lesson Study - Based Teacher Education. - The Potential of the Japanese Approach in Global Settings. |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖                                   | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>明治図書                                   | 5. 総ページ数<br>144 |
| 3. 書名<br>特別支援学校新学習指導要領「国語」「算数・数学」の学習指導案づくり・授業づくり |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖・湯浅恭正・吉田茂孝・今井理恵・小川英彦・櫻井貴大・佐野友十俊・高井和美・高橋浩平・堤英俊・手塚知子・廣内絵美・廣瀬信雄 | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>福村出版   | 5. 総ページ数<br>213 |
| 3. 書名<br>アクティブ・ラーニング時代の実践をひらく「障害児の教授学」                                     |                 |

|                                     |                 |
|-------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>吉田茂孝                      | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>八千代出版                     | 5. 総ページ数<br>349 |
| 3. 書名<br>PISA後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革 |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖・湯浅恭正・福田敦志・吉田茂孝・猪狩恵美子・石橋由紀子・稲田八穂・今井理恵・上森さくら・大前俊夫・小方朋子・甲斐昌平・加納幹雄・川崎みゆき・窪田知子・篠崎純子・高橋浩平・田中紀子・谷口恒宏・丹下加代子・塚本明美・堤英俊・永田麻詠・原田大介・日尾裕子・藤本祥史・宮本郷子 | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>ミネルヴァ書房  | 5. 総ページ数<br>223 |
| 3. 書名<br>よくわかるインクルーシブ教育  |                 |

|                               |                 |
|-------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>新井英靖                | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>かもがわ出版              | 5. 総ページ数<br>136 |
| 3. 書名<br>特別な支援を必要とする子どもの理解と教育 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                          | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)              | 備考 |
|-------|--|------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 福田 敦志<br><br>(Fukuda Atsushi)<br><br>(10325136)    | 大阪教育大学・教育学部・准教授<br><br><br>(14403) |    |
| 研究分担者 | 湯浅 恭正<br><br>(Takamasa Yuasa)<br><br>(60032637)    | 中部大学・現代教育学部・教授<br><br><br>(33910)  |    |
| 研究分担者 | 吉田 茂孝<br><br>(Shigetaka Yoshida)<br><br>(60462074) | 大阪教育大学・教育学部・准教授<br><br><br>(14403) |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

|         |         |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|